

保育者特性検査の妥当化II： 育児不安、自己観およびYG性格検査との関連性

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2013-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: FUJIMURA, Kazuhisa, SEKI, Gyousei メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/3834

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



保育者特性検査の妥当化Ⅱ — 育児不安、自己観およびYG性格検査との関連性 —

心理学部 発達教育心理学科 藤村 和久
東京福祉大学 心理学部 石 暁玲

要旨：本研究の目的は、藤村(2010、2011、2012)によって作成された保育者特性検査の妥当性を検証することである。母親の保育者特性と育児不安、相互協調的・相互独立的自己観との相関係数、そして女子大学の保育士・幼稚園教員養成課程の学生の保育者特性とYG性格検査の特性との相関係数を求めた。その結果、育児不安の高い母親は、自己中心的で、情緒的に非受容的で、社会的に消極的な傾向を持つことが明らかになった。そして、重回帰分析の結果から社交性、養育性の欠如が育児不安を生じさせる要因であることも明らかになった。さらに、保育者特性において積極的な傾向を持つ人は自律的、独立的、協調的、活動的、積極的なパーソナリティの特徴を持つことが明らかになった。

キーワード：保育、保育者適性、育児不安、YG性格検査、質問紙法

【問題】

藤村(2010)は、保育士、幼稚園教諭、育児中の母親など乳幼児や児童の保育や教育に何らかの形で携わっている人を保育者と呼び、保育・教育行動に現れる保育者の傾向的特徴を保育者特性と呼んだ。この保育者特性として愛他性、共感性、論理的思考性、気働き、社交性、行動力および養育性の7つの特性を抽出し、測定尺度を構成した。愛他性は、見返りを求めないで他者の利益になること、他者が喜ぶこと、他者のためになること、役に立つことに労を惜しまず行動する傾向を表す。共感性は、人の感情や気持ちを自分のことのように感じる傾向で、人に同情的で、人の気持ちを大切にでき、人との情緒的コミュニケーションを形成しやすい。論理的思考性は、多面的に物事を考えたり、物事を解ろうと努力し、事実や論理、普遍的な理論や法則性などを基準に物事を認識しようとする傾向である。気働きは、人の様子やちょっとした変化からも、心の状態、気持ちなどを繊細に感じ取り、きめ細やかな気遣いをする傾向をいう。社交性は、人と気軽に交わり、対人関係に積極的に広く人々と交流する傾向をいう。人当たりがよく、気さくで相手を緊張させないといった傾向を持つ。行動力は、物事に自主的、積極的に取り組む。よいと思ったことは実行し、問題解決に能動的な傾向を表す。そして、養育性は子どもや若い人たちに対して、よく世話をしたり、援助したりす

ることに労を惜しまない。また、その人たちの成長を喜ぶ傾向を表す。

これら7つの保育者特性尺度の信頼性は、 α 係数が0.784~0.867、 ω 係数が0.785~0.868で十分な信頼性と尺度の同質性(homogeneity; McDonald, 1999)が得られた。また、各尺度の尺度項目間の因子分析から、尺度項目の因子的妥当性が確認された。

また、藤村(2011、2012)は現役の保育士、幼稚園教諭、育児中の母親、大学生女子、ケアマネジャー、保育関係施設職員等のサンプル間の弁別的妥当性を検証した。

さらに、1496名の各尺度の得点分布をもとに各尺度の標準化を行ない、5段階標準得点による個人の保育者特性プロフィールが作成可能になった(藤村、2012)。

乳幼児の保育・教育行動に機能するこれらの行為者の諸特性が、①保育・教育、あるいは他者との社会的関係にまつわる諸問題とどのような関連性を持つか、②これらの保育者特性と呼んだ特性が他のパーソナリティ特性とどのような関連性を持つか等々、様々な基準との関連性を明らかにすることによって保育者特性の妥当性を検証する必要がある。

本研究では、まず母親の育児不安との関連性について検討する。母親の育児不安の研究は、石・桂田(2010)によるとソーシャル・サポートの視点から多くの研究がなされてきた。母親が受けるサポートは以前より増

えたにもかかわらず、母親の育児不安が一層高くなっているといった研究（原田、2008）や、ソーシャル・サポートが精神的健康に良い影響を及ぼすのはストレスレベルが低い場合のみで、高い場合はその効果が消失するといった研究（久田・箕口・千田、1986）など、育児不安に及ぼす母親のパーソナリティ的な要因を示唆する研究もある。石・桂田（2010）は、パーソナリティ要因の一つとして母親が認知する自己観との関係を取り上げ、育児不安との関連性を検討した。育児不安が相互協調的自己観と0.383 ($p < 0.01$)、相互独立的自己観とは-0.291 ($p < 0.01$) のそれぞれ有意な相関を持つことが明らかになった。すなわち、相互協調的なパーソナリティ傾向は育児不安を持ちやすい、また相互独立的な傾向は育児不安を抱くことが少ないといった関係を意味する。

さらに、保育者特性と性格特性との関連性を検討することによって、保育者特性の構成概念的な意味とパーソナリティ的特性としての機能を明らかにする。

本研究では、第1調査では、個々の保育者特性と育児不安との関連性を検証するとともに、石・桂田が取り上げた自己観との関連性を明らかにすることを目的とする。さらに、第2調査では、保育者特性の7特性とYG性格検査の12特性との関連性を明らかにすることを目的とする。

【方法】

第1調査 田中(1997)が作成した育児不安10項目、高田(2000)の相互協調的自己観、相互独立的自己観尺度の短縮版10項目および保育者特性49項目からなる調査票を作成し、幼稚園を通じ園児の母親に回答を依頼した。調査票は幼稚園を通じて幼稚園児が持ち帰り、母親が回答し、幼稚園児により回収された。

第2調査 某私立大学女子学生を対象に、保育者特性49項目からなる質問紙とYG性格検査を配布し、回答後回収した。調査は無記名で授業中に実施し、調査への協力は任意とした。保育者特性の質問紙に関しては「各項目の内容がいつもの自分にどの程度あてはまるか」について、「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」の5段階で答えるよう求めた。YG性格検査については、YG性格検査の教示どおりに回答を求めた。

【結果】

第1調査 保育者特性と育児不安の関連性

保育者特性と育児不安との関連性を検討する際に、

育児不安に及ぼす保育者特性以外の生活形態的要因の影響の度合いを検討する。なぜなら、本研究の目的は保育者特性と育児不安の関連性を検討することを目的とし、それ以外の要因が育児不安の起因になっていれば、その影響を除去した関連性を評価しなければならないからである。

(1) 職業形態と育児不安

母親の職業形態を、パートタイム、フルタイム、専業主婦に分け、各サンプル数は表1のとおりである。育児中の母親223名のうち、本項目に対する欠損値が1名あり、222名を本分析の対象とした。

表1 母親の職業形態

	度数	パーセント
パート	87	39.2
フルタイム	127	57.2
専業主婦	8	3.6
計	222	100.0

表2は母親の職業形態別による育児不安の平均値の差の有無を、1要因分散分析によって検討した結果である。

表2 育児ストレスの職業形態別の分散分析表

	平方和	df	MS	F値	確率
グループ間	69.811	2	34.905	1.415	0.245
グループ内	5400.928	219	24.662		
合計	5470.739	221			

母親の職業形態別による育児不安に有意差は見られなかった。

(2) 母親の学歴と育児不安

本調査では、母親の学歴を中学卒、高校卒、専門学校卒、短大卒、大学卒、大学院卒に分け回答を求めた。その内訳は表3のとおりである。

本項目に関しては欠損値が3名あったため、220名が分析の対象となった。石・桂田(2010)では母親の学歴と育児不安との間に-0.146 ($p < 0.05$)の弱いながら負の有意な相関が報告されているが、本研究では表4のとおり学歴間に育児不安の差はみられなかった。

表3 学歴別人数

学歴	人数	パーセント
中学卒	9	4.1
高校卒	51	23.2
専門学校卒	54	24.5
短大卒	58	26.3
大学卒	48	21.8
大学院卒	0	0.0
合計	220	100.0

表4 学歴別の分散分析表

	平方和	df	MS	F 値	確率
グループ間	88.670	4	22.167	0.914	0.457
グループ内	5214.762	215	24.255		
全体	5303.432	219			

(3) 家族形態と育児不安

次に、家族形態別のサンプル数は表5のとおりである。

表5 家族形態

家族形態	度数	パーセント
拡大家族	35	15.7
核家族	158	70.9
母子家庭	19	8.5
因子拡大家族	11	4.9
計	223	100.0

ここで、拡大家族とは両親と子どもの他に両親の親、兄弟（姉妹）などが同居している場合をいう。また、母子拡大家族とは母子と母の親や兄弟などが同居している家族をいう。

表6は家族形態による育児不安の程度の差を、1要因分散分析を適用して検討した結果である。

表6 育児ストレスの家族形態別の分散分析表

	平方和	df	MS	F 値	確率
グループ間	105.290	3	35.097	1.405	0.242
グループ内	5469.535	219	24.975		
合計	5574.825	222			

表6より、家族形態別の育児不安の平均値差は有意でなく、家族形態と育児不安との関連性は認められな

い。

表1～表6により、母親の職業形態、学歴、家族形態といった生活形態、属性的要因と育児不安の間には有意な関連性はみられなかった。

保育者特性と育児不安との関連性

保育者特性7尺度と育児不安との相関係数は表7のとおりである。

表7 保育者特性と育児不安の相関係数

保育者特性	育児不安	相互協調的自己観	相互独立的自己観
愛他性	-0.149*	0.107	0.163*
共感性	-0.099	0.074	0.034
論理的思考性	-0.078	-0.007	0.194**
気働き	-0.128	0.089	0.255**
社交性	-0.441**	-0.194**	0.286**
行動力	-0.374**	-0.198**	0.461**
養育性	-0.351**	-0.014	0.136*
情緒的受容性	-0.230**	0.066	0.127
思考的繊細性	-0.121	0.052	0.262**
行動的積極性	-0.447**	-0.214**	0.404**

* $p < 0.05$; ** $p < 0.01$

保育者特性と育児不安との相関は、愛他性と -0.149 ($p < 0.05$)、社交性と -0.449 ($p < 0.01$)、行動力と -0.374 ($p < 0.01$)、養育性と -0.351 ($p < 0.01$) でそれぞれ有意な相関を有する。表中、情緒的受容性、思考的繊細性、行動的積極性とあるのは、それぞれ愛他性、共感性、養育性の3特性に共通に機能する因子、論理的思考性、気働きに共通に機能する因子、社交性、行動力に共通に機能する因子をいう。藤村(2010)では、論理的思考性、気働きの共通因子を多面的思考性と呼んだが、第2調査のYG性格検査との関連性から、以後思考的繊細性と呼ぶことにする。したがって、情緒的受容性は愛他性、共感性、養育性の尺度得点の合計である。同様に、思考的繊細性は論理的思考性と気働きの尺度得点の合計、行動的積極性は社交性、行動力の尺度得点の合計である。

次に、育児不安得点における25パーセント以下サンプル51名を低育児不安群、75パーセント以上サンプル58名を高育児不安群とし、それぞれの保育者特性平均値を、藤村(2011)の保育者特性プロフィールを表すリーダーチャート上に表したものが図1である。

表 8 低育児不安群と高育児不安群の保育者特性平均値

保育者特性	低育児不安群	高育児不安群	差の有意性
愛他性	17.82	16.36	*
共感性	19.06	18.00	n.s.
論理的思考性	16.08	15.40	n.s.
気働き	16.51	15.09	n.s.
社交性	18.88	13.12	**
行動力	18.27	13.60	**
養育性	18.10	14.64	**

* $p < 0.05$; ** $p < 0.01$

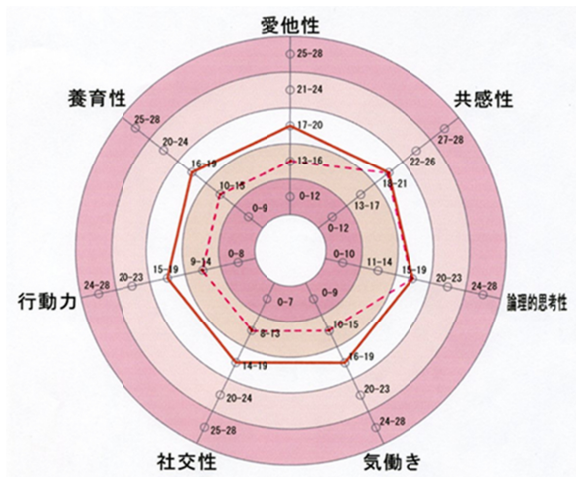


図 1 高育児不安群と低育児不安群の保育者特性平均値

図中、実線が低育児不安群の平均値、点線が高育児不安群の平均値である。低育児不安群が全ての特性値の平均値が標準点 3 で平均的であるの対して、高育児不安群は保育者特性の愛他性、気働き、社交性、行動力、養育性の平均値が標準点 2 で低いことがわかる。

次に、育児不安を目的変数、7 つの保育者特性を説明変数として重回帰分析を適用した結果が表 9 である。

表 9 育児不安への保育者特性の重回帰

説明変数	目的変数 育児不安		有意性
	非標準化係数	標準化係数	
(定数)	32.168		***
愛他性	0.157	0.119	n. s.
共感性	0.058	0.050	n. s.
論理的思考性	0.116	0.088	n. s.
気働き	0.107	0.095	n. s.
社交性	-0.322	-0.329	***
行動力	-0.126	-0.118	n. s.
養育性	-0.471	-0.357	***

$R = 0.523$ $R^2 = 0.273$

以上のことから、保育者特性尺度は育児不安という

基準との関連性では、愛他性、気働き、社交性、行動力、養育性の個人の特性的なあり方と関連していることが明らかになった。相関性の強さからは、育児不安が行動的積極性すなわち社交性と行動力が、情緒的受容性のうち特に養育性が低い傾向がみられる。さらに、重回帰分析の結果からは特に社交性、養育性の欠如が育児不安と結びつきやすいことが明らかになった。

育児不安と保育者特性プロフィールの事例的検討

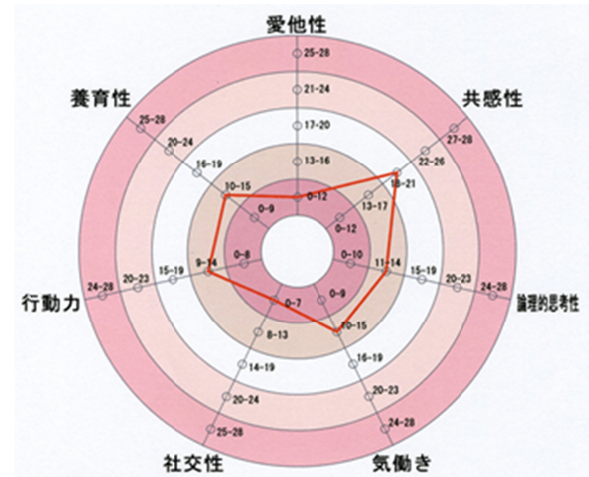


図 2 高育児不安の保育者特性プロフィール例

図 2 は育児不安の高い母親の保育者特性プロフィール例である。共感性特性が標準点 3 である以外は全て標準点 2 ないし 1 である。

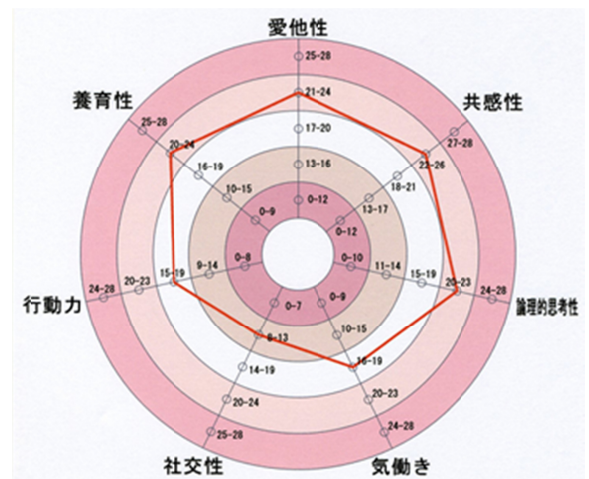


図 3 高育児不安の保育者特性プロフィール例

図 3 は育児不安の高い母親の保育者特性プロフィール例である。愛他性、共感性、養育性すなわち情緒的

受容性に関する特性が全て標準点4で、十分な水準にあり、論理的思考性、気働きといった思考的繊細性に関する特性も、それぞれ標準点が4と3であり問題は見られない。しかし社交性が標準点2、行動力が標準点3であり、特に社交性が低い。

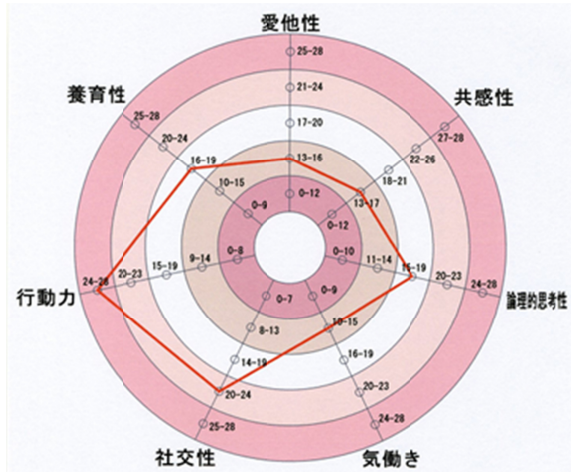


図4 低育児不安の保育者特性プロフィール例

図4は育児不安の低い母親の保育者特性プロフィール例である。このプロフィール例は、愛他性、共感性が共に標準点2でかなり低く、養育性も標準点3で平均的である。論理的思考性が3で平均的、気働きが2でかなり低い。他方、社交性が4、行動力が5で行動的積極性に関する特性が非常に高い例である。情緒的受容性とくに愛他性、共感性がかなり低いこと、また気働きもかなり低いことは保育・教育的観点からはかなり問題があるにも関わらず、育児不安とは結びついていないことを表す事例である。本例は、先の育児不安への重回帰分析の結果からも明らかなように、社交性が標準点4で高く、養育性が標準点3であることから、育児不安に結びつかないものと考えられる。

図5は、育児不安の低い母親の保育者特性プロフィール例である。愛他性が2、共感性が1、養育性が2で情緒的受容性が低く、論理的思考性が3、気働きが2で低い。行動力が2であるが社交性が4とかなり高い。本プロフィールは総じては、子どもと気さくに関わっていけるが、情緒的受容性に乏しく、細やかな気遣いが出来ず、実行力に乏しいといった、保育・教育的には極めて問題があると考えられるが、本人は育児に関する不安を感じていないといった例である。これは、先の育児不安への重回帰分析の結果からも明らかなように、本プロフィールは養育性が低い、社交性が標準点4と非常に高く、育児不安に結びつかない例とい

える。

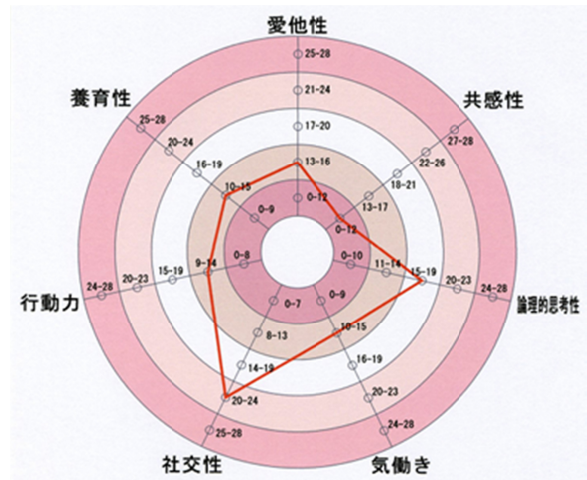


図5 低育児不安の保育者特性プロフィール例

保育者特性と自己観との関連性

育児不安と自己観との相関は、相互独立的自己観とは0.300 ($p < 0.01$)、相互独立的自己観とは-0.125 (*n.s.*)であった(表7)。石・桂田(2010)では、育児不安と相互協調的自己観とは0.383 ($p < 0.01$)、相互独立的自己観とは-0.291 ($p < 0.01$)のそれぞれ有意な相関を報告しているが、本研究では相互協調的自己観とのみ有意な相関が確認された。また、相互協調的自己観と相互独立的自己観の間にも負の有意な相関を報告しているが、本研究においては両自己観の相関は0.002でほぼ無相関であった。

保育者特性と自己観との相関係数は、相互協調的自己観が社交性と-0.194 ($p < 0.01$)、行動力と-0.198 ($p < 0.01$)の負の有意な相関を持つ。相互独立的自己観は、社交性と0.286 ($p < 0.01$)、行動力と0.461 ($p < 0.01$)、論理的思考性と0.194 ($p < 0.01$)、気働きと0.255 ($p < 0.01$)、愛他性と0.163 ($p < 0.05$)、養育性と0.136 ($p < 0.05$)の有意な相関を示す。相互協調的自己観は他者の自分への評価を気にしたり、他者と対立したりするのを避ける傾向を示し、相互独立的自己観は自分が良いと思うところに従い、自己を貫く傾向を示す。相互協調的自己観と社会性、行動力が負の関連性を持ち、また相互独立的自己観が共感性を除く全ての特性と正の関連性を示す。行動的積極性(社交性、行動力)の乏しさが相互協調的自己観と相関を有し、相互独立的自己観は、共感性を除く全ての保育者特性と正の有意な相関を持つことから、保育者特性は他者との独立的、自律的な関係性により機能しやすくなるものといえる。

表 11 保育者特性と YG 性格検査特性の相関係数

	愛他性	共感性	論理的 思考性	気働き	社交性	行動力	養育性
抑うつ性	-0.119*	-0.034	-0.007	-0.126*	-0.330**	-0.240**	-0.181**
回帰性	-0.078	0.089	-0.044	-0.048	-0.149*	-0.054	-0.143*
劣等感	-0.031	0.027	0.012	-0.106	-0.508**	-0.417**	-0.178**
神経質	-0.060	0.038	0.193**	0.029	-0.393**	-0.231**	-0.116*
主観性	-0.046	0.067	0.000	-0.075	-0.204**	-0.100	-0.088
非協調性	-0.276**	-0.149*	-0.025	-0.133*	-0.233**	-0.163**	-0.309**
攻撃性	0.013	-0.028	0.130*	0.082	0.214**	0.351**	0.076
一般的活動性	0.257**	0.138*	0.148*	0.323**	0.566**	0.567**	0.295**
のんきさ	0.055	0.041	-0.190**	0.008	0.418**	0.396**	0.036
思考的外向性	0.040	0.027	-0.437**	-0.073	0.295**	0.110	0.013
支配性	0.138*	0.052	0.063	0.235**	0.702**	0.539**	0.279**
社会的外向性	0.200**	0.116*	-0.025	0.209**	0.822**	0.515**	0.221**

* $p < 0.05$; ** $p < 0.01$

第2調査 YG 性格検査との関連性

保育者特性検査 7 尺度と YG 性格検査 12 特性との相関係数は表 11 のとおりである。表中*は 5%水準、**は 1%水準での有意性を表す。

表 11 から明らかなように、保育者特性尺度と YG 性格検査尺度との相関係数の有意性検定は自由度に依存するため、サンプル数が多い場合絶対値が小さくても有意となる。本研究のサンプル数が 291 であり、たとえば愛他性と抑うつ性の場合、相関係数が -0.119 でも 5%水準で有意となる。相関係数の有意性検定は周知のように $\rho = 0$ という帰無仮説が確率的に是認されるかどうかの検定であり、その関係性の程度は相関係数の大小によるが、相関係数の値が低くても有意性がある場合、少なくとも蓋然性としての関係性を有するものとして以下論じていくことにする。

愛他性は抑うつ性と -0.119 ($p < 0.05$)、非協調性と -0.276 ($p < 0.01$)、一般的活動性と 0.257 ($p < 0.01$)、支配性と 0.138 ($p < 0.05$)、社会的外向性と 0.200 ($p < 0.01$) のそれぞれ弱いながらも有意な相関を持つ。YG 性格検査の非協調性は、「親友でも本当は信用できない」「人は結局利欲のために働くのだと思う」などの項目に代表されるように、不信性、不満性を表す。また、愛他性は一般的活動性、支配性、社会的外向性と正の相関性を示し、気軽に他者に関わり、自己の価値や思いに主導的に行動するといった特性であると考えられる。愛他性は他者のために、他者の利益を図ろうとする特性であり、他者を信頼し、他者への積極的な行動傾向により特徴づけられるものといえる。

共感性は非協調性と -0.149 ($p < 0.05$)、一般的活動

性と 0.138 ($p < 0.05$)、社会的外向性と 0.116 ($p < 0.05$) のそれぞれ弱いながらも有意な相関を持つ。保育者特性の共感性は、他者と同じような気持ちになれるといった傾向であり、これが不信性、不満性と負の関係性をもつ。すなわち、共感性は他者との情緒的コミュニケーションの基礎であり、他者との信頼感にもとづいた親和性に関係する特性であると考えられる。

論理的思考性は YG 性格検査の神経質と 0.193 ($p < 0.01$)、攻撃性と 0.130 ($p < 0.05$)、一般的活動性と 0.148 ($p < 0.05$)、のんきさと -0.190 ($p < 0.01$)、思考的外向性と -0.437 ($p < 0.01$) のそれぞれ有意な相関を持つ。論理的思考性は思考的内向性、つまり熟慮的、瞑想的な傾向と中程度の相関を持ち、細やかさに関する神経質とも有意な相関を持つ。YG 性格検査 12 尺度間の相関行列の因子分析においては思考的外向性は、通常のにんきさと共通因子を構成し非内省性因子と呼ばれている(辻岡・藤村、1975; 藤村、2010)。神経質は細やかに物事を考えるといった繊細性を持ち思考的内向性ととも共通因子を構成する(藤村、2010)。これらの YG 性格検査尺度と保育者特性の論理的思考性が相関性を有することは、論理的思考性の構成概念的妥当性を示すものと考えられる。藤村(2010)は保育者特性間の因子分析結果から、論理的思考性と気働きに共通に機能する因子を多面的思考性と呼んだが、上述のように論理的思考性が弱いながらも神経質と有意な相関を持つことから、多面的思考性因子を以後思考的繊細性因子と呼ぶことにする。論理的思考性がさらに攻撃性、一般的活動性との正の相関性を有することは、眼前の事象に対する積極的な関与性を示唆するものと

して興味深い。

気働きは YG 性格検査の抑うつ性と -0.126 ($p < 0.05$)、非協調性と -0.133 ($p < 0.05$)、一般的活動性と 0.323 ($p < 0.01$)、支配性と 0.235 ($p < 0.01$)、社会的外向性と 0.209 ($p < 0.01$) のそれぞれ有意な相関を持つ。気働き尺度は、人の様子やちょっとした変化からも、心の状態、気持ちなどを繊細に感じ取り、きめ細やかな気遣いをするといった傾向を表す項目群からなり(藤村、2010、2011、2012)、本尺度の心理学的特徴は、非抑うつ的、つまり明るく、協調的で社会的に積極的な行動傾向と関連すると理解できる。

社交性は YG 性格検査の 12 の全ての尺度と有意な相関をもつ。特に支配性、社会的外向性とは特に強い正の相関を持ち、一般的活動性とも比較的高い正の相関を持つ。劣等感とは負の比較的高い相関を持つ。社交性尺度は、概して情緒安定・外交的特性の性質を有するものといえる。

行動力は YG 性格検査の抑うつ性と -0.240 ($p < 0.01$)、劣等感と -0.417 ($p < 0.01$)、神経質と -0.231 ($p < 0.01$)、非協調性と -0.163 ($p < 0.01$)、攻撃性と 0.351 ($p < 0.01$)、一般的活動性と 0.567 ($p < 0.01$)、のんきさと 0.396 ($p < 0.01$)、支配性と 0.539 ($p < 0.01$)、社会的外向性と 0.515 ($p < 0.01$) のそれぞれ有意な相関を持つ。行動力は物事に自主的、積極的に取り組もうとする傾向であり、よいと思ったことは実行し、問題解決に能動的といった実行力を表す尺度として構成されたものであり(藤村、2010、2011、2012)、YG 性格検査の思考的外向性を除く外向性に関する尺度と正の中程度の相関をもつこと、そして劣等感とは負の中程度の相関を持つことは、本尺度の構成概念的妥当性を示すものである。

養育性は YG 性格検査の抑うつ性と -0.181 ($p < 0.01$)、回帰性と -0.143 ($p < 0.05$)、劣等感と -0.178 ($p < 0.01$)、神経質と -0.116 ($p < 0.05$)、非協調性 -0.309 ($p < 0.01$)、一般的活動性と 0.296 ($p < 0.01$)、支配性と 0.279 ($p < 0.01$)、社会的外向性と 0.221 ($p < 0.01$) のそれぞれ有意な相関を持つ。養育性尺度は、子どもや若い人たちに対して、よく世話をしたり、援助したりすることに労を惜しまない。また、その人たちの成長を喜ぶ気持ちが強い傾向を表す尺度として構成された尺度であり(藤村、2010)、概して情緒安定的で協調的、非攻撃的で社会的に積極的な性格特性と関係することが明らかになった。

保育者特性の全ての尺度が YG 性格検査の一般的活動性と有意な相関を持つ。また、論理的思考性を除く

全ての尺度が YG 性格検査の社会的外向性と有意な正の相関を持つ。さらに、論理的思考性を除く全ての尺度が、YG 性格検査の非協調性と負の有意な相関性をもつ。すなわち他者に対する不信感が少なく、協調的な性格特性と関係性を有することが明らかになった。

保育者特性検査は乳幼児や児童の保育や教育行動に現れる保育者や教育者の行動的傾向を特性として捉えようとするものである(藤村、2010)。言い換えれば、社会的場面における他者との相互的行動において必要とされる特性次元として測定することを目的としたものである。したがって、これらの特性が論理的思考性を除いて、性格特性としての他者への協調性(信頼感)、一般的活動性、社会的外向性と有意な相関性を示すことは心理機能として妥当なものと考えられる。また、論理的思考性は性格特性としての思考的内向性、非衝動性(のんきでない)と有意な相関性を示すことも本尺度の構成概念的妥当性を示すものである。

また、保育者特性は総じて YG 性格検査の情緒不安定性に関する特性とは負の相関性を有し、外向性に関する特性とは正の相関性を示すことが明らかになった。

保育者特性尺度と YG 性格特性尺度との因子構造的関係性

保育者特性 7 尺度と YG 性格検査 12 尺度、計 17 尺度間の相関行列の因子分析を行った。相関行列の固有値によるスクリーグラフから因子数を 4 とし、主因子法の繰返しによる共通性の推定を行ない、主因解に Varimax 法、さらに Promax 法により斜交因子解を求めた。表 12 は Promax 解の因子パターン行列と因子間相関を示したものである。

第 1 因子 YG 性格検査の抑うつ性 (0.825)、回帰性 (0.889)、劣等感 (0.625)、神経質 (0.808)、主観性 (0.760)、非協調性 (0.688)、攻撃性 (0.571)、思考的外向性 (-0.560) が高いパターン値を持つ因子で、情緒不安定性因子である。本因子に保育者特性尺度は殆ど関与しない。

第 2 因子 保育者特性の社交性 (0.760)、行動力 (0.677)、YG 性格検査の劣等感 (-0.472)、攻撃性 (0.649)、一般的活動性 (0.662)、のんきさ (0.709)、支配性 (0.767)、社会的外向性 (0.836) が高いパターン値を持つ因子で保育者特性を中心に考え、本因子は行動的積極性因子と呼ぶことにする。保育者特性の社交性、行動力は保育者特性 7 尺度間の因子分析では行動的積極性と名付けられた因子を構成する(藤村、2010a) が、これらが YG 性格検査の外向性因子と人

格構造的な関連性を持つことが因子構造的に明らかである。保育者特性を主に考え、本因子を行動的積極性因子と呼ぶことにする。

表 12 保育者特性と YG 性格検査との因子構造的関係

		情緒不安定性	行動的積極性	情緒的受容性	思考的繊細性	
保育者特性	愛他性	0.001	0.000	0.876	-0.005	
	共感性	0.115	-0.063	0.868	-0.106	
	論理的思考性	-0.002	0.025	0.110	0.879	
	気働き	-0.009	0.148	0.464	0.329	
	社交性	-0.114	0.760	0.117	-0.075	
	行動力	-0.019	0.677	0.097	0.257	
	養育性	-0.094	0.130	0.585	0.222	
	抑うつ性	0.825	-0.093	0.002	-0.008	
	回帰性	0.889	0.147	0.100	-0.155	
	劣等感	0.625	-0.472	0.164	-0.026	
	神経質	0.808	-0.168	0.045	0.180	
YG 性格検査	主観性	0.760	0.055	0.076	-0.074	
	非協調性	0.688	0.040	-0.211	0.030	
	攻撃性	0.571	0.649	-0.132	0.105	
	一般的活動性	-0.105	0.662	0.050	0.106	
	のんきさ	0.372	0.709	0.021	-0.320	
	思考的外向性	-0.560	0.110	0.111	-0.505	
	支配性	-0.147	0.767	-0.077	0.067	
	社会的外向性	-0.071	0.836	0.011	-0.097	
	因子間相関	情緒不安定性	1.000	-0.264	-0.154	0.074
		行動的積極性	-0.264	1.000	0.270	0.038
		情緒的受容性	-0.154	0.270	1.000	0.335
思考的繊細性		0.074	0.038	0.335	1.000	

第 3 因子 保育者特性の愛他性 (0.876)、共感性 (0.868)、養育性 (0.585)、気働き (0.464) が高いパターン値をもち、YG 性格検査の非協調性 (-0.211) が弱いながらも関与する因子で、情緒的受容性因子とよぶ。

第 4 因子 保育者特性の論理的思考性 (0.879)、気働き (0.329)、YG 性格検査ののんきさ (-0.320)、思考的外向性 (-0.505) から成る因子で思考的繊細性因子と呼ぶことにする。YG 性格検査の因子構造的関係では、思考的外向性、のんきさ、神経質が 1 つの共通因子を構成する (藤村、2010b)。すなわち、熟慮的・瞑想的、非衝動的、繊細性といった内容を表す共通因子である。保育者特性の社交性、行動力尺度を除いて、それぞれのバッテリー内の尺度間の相関がバッテリー間の尺度間相関よりも相対的に大きいことから、本因子には神経質があまり関与しないが、表 11 の相関係数および YG 性格検査の因子構造的性質から、本因子を

思考的繊細性とよぶのが妥当と考える。

気働きが情緒的受容性因子と本因子の両因子に関与することが本サンプルでの因子構造で明らかになった。気働きは「人の様子やちょっとした変化からも、心の状態、気持ちなどを繊細に感じ取り、きめ細やかな気遣いをする傾向」であり、相手への細やかな気づきは情緒的受容性と気づいた内容の理解は思考的な活動であることが考えられる。

【考察】

育児不安との関係から、保育者特性検査の愛他性、養育性、社交性、行動力と負の相関を持つことから、育児不安の強い人は、自己中心的傾向が強く、幼いや若い人への関心が薄く成長を喜ぶ気持ちが弱い。また、人とかかわるのが苦手で、対人関係にストレスを感じ易く、自分から進んで物事に取組むことができないといった人格像が明らかになった。

自己観との関係では、相互協調的自己観が保育者特性検査の社交性、行動力と負の相関を持つことから、相互協調的自己観は非社会的、行動力・実行力の欠如といった特性を持つ傾向がある。また、相互独立的自己観が共感性を除く全ての保育者特性と正の相関を持つことから、愛他性、論理的思考性、気働き、社交性、行動力、養育性といった保育者特性を構成する具体的な行動を行うかどうかは自己に属するものであって、決して他者から強いられたり、他者に合わせて行うのではなく、あくまでも、行為主体としての自律性・独立性に基づくものと考えられる。

YG 性格検査との関係から、①保育者特性と YG 性格検査特性とは、総じては YG 性格検査の情緒不安定な特性とは負の、そして外向性に関する特性とは正の相関を有する。②保育者特性検査の全ての尺度が、YG 性格検査の一般的活動性と正の相関をもち、保育者特性の論理的思考性を除く全ての特性が非協調性とは負の、社会的外向性とは正の相関を持つことが明らかになった。YG 性格検査の非協調性は、前述のように他者や世界に対する不信感に根差しており、保育者特性は他者への信頼感に根差した協調的で、心身ともに活動的で、社会的 (対人的) に積極的な特徴を帯びるものといえる。

他方、論理的思考性は YG 性格検査の思考的外向性、のんきさと負の、そして神経質とは正の相関を持ち、本尺度の構成概念的妥当性を表すものである。

保育者特性は、保育者と子どもとの社会的関係に機能する保育者の行動傾向であり、これらが健康的な方

向で機能する個人の自律的、独立的で、他者に対する基本的な信頼感を有し、活動的で身軽に行動することができ、積極的な特性であることが明らかになった。

今後、さらに多様な基準との関連性を検討することによって、保育者特性検査の妥当化を図っていく予定である。

【引用文献】

- 藤村和久 (2010) Erikson のパーソナリティ構成要素と性格特性、エゴグラムとの関連性 —EPCS と YG 性格検査、TEG II との確認的因子分析による— 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要、9, 115-127.
- 藤村和久 (2010) 保育士、幼稚園教諭を目指す学生のための保育者適性尺度の構成 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要、9, 129-143.
- 藤村和久 (2011) 保育者特性インベントリィの妥当化 I 大阪樟蔭女子大学研究紀要、1, 86-96.
- 藤村和久 (2012) 保育者特性インベントリィ (NTI) の標準化 大阪樟蔭女子大学研究紀要、2, 23-33.
- McDonald, R. P. 1999 *Test Theory: A Unified Treatment*. Lawrence Erlbaum Associates.
- 石 曉玲・桂田恵美子 (2010) 保育園児を持つ母親のディストレス: ソーシャルサポートとの関連 発達心理学研究、21, 138-146.
- 高田利武 (2000) 相互独立的—相互協調的自己観尺度に就いて 奈良大学総合研究所処報第 8 号、145-163.
- 田中昭夫 (1997) 幼児を保育する母親の育児不安に関する研究 乳幼児教育学研究、6, 57-64.
- 久田 満・箕口雅博・千田茂博 (1986) ソーシャル・サポートのストレス緩和効果 日本心理学会第 50 回大会発表論文集、729.

Validation of the Nursery Trait Inventory II: Relations between the Nursery Trait Inventory and Child-rearing Anxiety, Interdependent/Independent Self-construal, and the YG Personality Inventory

Faculty of Psychology, Department of Development and Educational Psychology
Kazuhiisa FUJIMURA
Tokyo University of Social Welfare
Gyourei SEKI

Abstract

This study sought to test the validity of The Nursery Trait Inventory (Fujimura, 2010, 2011, 2012). We analyzed the correlations between the nursery traits of mothers with young children and their child-rearing anxiety and interdependent/independent self-construal, and between nursery traits and YG personality traits of students taking a course in nursery teaching and kindergarten teaching at a women's university. The results revealed that high child-rearing anxiety mothers exhibited egocentric tendencies, emotional non-acceptance tendencies and social introversion tendencies. The multiple regression analysis results revealed that a lack of sociability and nurturing caused child-rearing anxiety. Furthermore, the correlations between seven nursery traits and 12 personality traits on the YG Personality Inventory indicate that people exhibiting positive nursery traits tend to be autonomous, independent, cooperative, and positive.

Keywords : nurturing, aptitude in nurturing, child-rearing anxiety, YG Personality Inventory, questionnaire method

